

糖尿病教室の運営について ―外来運営から病棟運営に移行して―

About the direction of the class for diabetics

- It shifts from the clinic staff to the ward staff-

東8階病棟 山田友美 新田麻由子 小野真理子 小林由香
松村裕子 里直子 堀水詳子 古町千鶴 小林利江

<要旨>

当病棟では糖尿病教室(以下、教室と略す)を開催し、集団指導を実施している。教室は外来スタッフで運営し、病棟看護師は講師として介入した。個別指導については病棟看護師が行っていた。個別指導をする際には、教室の内容やその内容に対する患者の理解の程度について把握することが必要であると考えた。そのため、今年度より教室を外来運営から病棟運営に移行した。病棟運営が可能であり、病棟看護師の教室への関心が高まった。

<キーワード> 糖尿病教室 運営 支援

I. 目的

糖尿病支援には教室という集団指導と個々の糖尿病患者(以下、患者と略す)に合った支援を行う個別指導の2つの方法がある。

昨年度までは外来スタッフ2名で教室を運営し、病棟看護師は「日常生活の注意点」についての講師として介入を行っていた。外来スタッフで運営していた理由として勤務態勢や開催時間・日程により病棟看護師が介入することが困難であると考えられた。しかし病棟看護師が患者に個別指導をする際、教室での支援内容の把握が必要であり、そのために病棟看護師が教室の運営に参加し関心を高めることが重要であると考えた。そこで、7:1看護体制となり看護師が増員されたことで人的資源に余裕ができたため教室の日程調整を行い、今年度より外来から病棟看護師へ運営を移行した。今後、病棟運営の継続が可能であるか、運営上の改善点について看護師の意見を得て評価したのでここに報告する。

II. 研究方法・倫理的配慮

調査対象：病棟看護師

調査期間：平成 21.6 月から 12 月

調査方法：質問紙調査

倫理的配慮：対象者には個人が特定できないように配慮した。

教室運営方法：平成 21.6 月より毎月第 1 週～3 週目の火曜日（一部月曜）、14 時～15 時で教室を開催した。毎月の教室内容を検討し、ポスターを作成し、講師の日程調整（加齢総合診療科医師・薬剤師・歯科医師・歯科衛生士・栄養士・糖尿病認定看護師・病棟看護師）を行った。病棟看護師運営マニュアルを作成した。また病棟看護師が全員参加できるように、担当表を作成し毎月交代で 3～4 名で実施した。

III. 結果

6 月～12 月まで運営に参加した看護師 16 名にアンケート調査を行った。看護師アンケート：13 名（81%）から回答が得られた。

1. 看護師アンケート結果（図 1～4）

1) 開始時間：早い 3 名、適当 10 名、遅い 0 名

理由：当病棟では 13 時半～14 時までカンファレンスを行っており、会場準備などで 14 時開始は間に合わない。

2) 開催期間：3 回/月開催する現在の方法 11 名

4 回/週開催する従来の方法 0 名 無回答 1 名

理由：準備や当日までの打ち合わせにゆとりがあってよい。

3) 運営マニュアルの使い易さ：使い難い 0 名、普通 4 名、使い易い 9 名

理由：初めてでも何をしたらよいか明確でスムーズにできた。

4) 今後も運営可能であるか：不可能 0 名、可能 12 名、無回答 1 名

理由：運営は可能だが、本来フリー業務をするスタッフが糖尿病教室に参加すると他のスタッフへの負担が大きくなる。「日常生活の注意点」について月毎に担当した看護師が資料を新しく作成するため資料作りや発表が大変である。

図1 ①教室開始時間 14時開始について

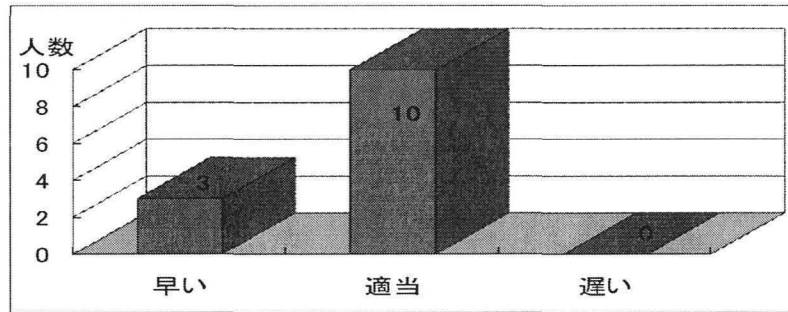


図2 ②教室開催期間

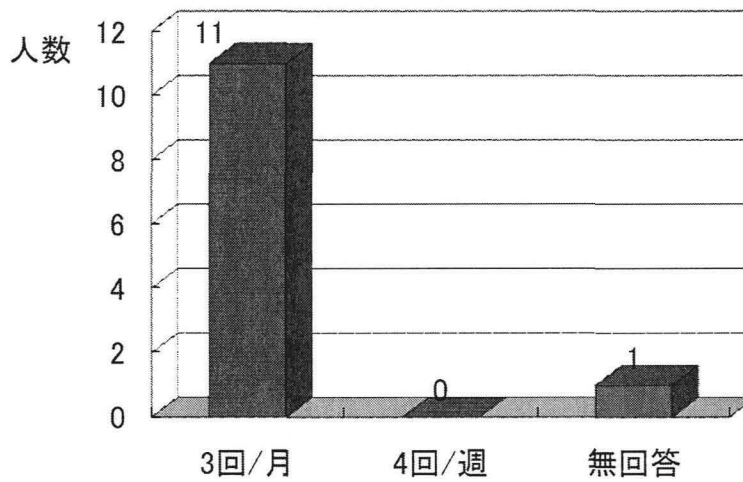
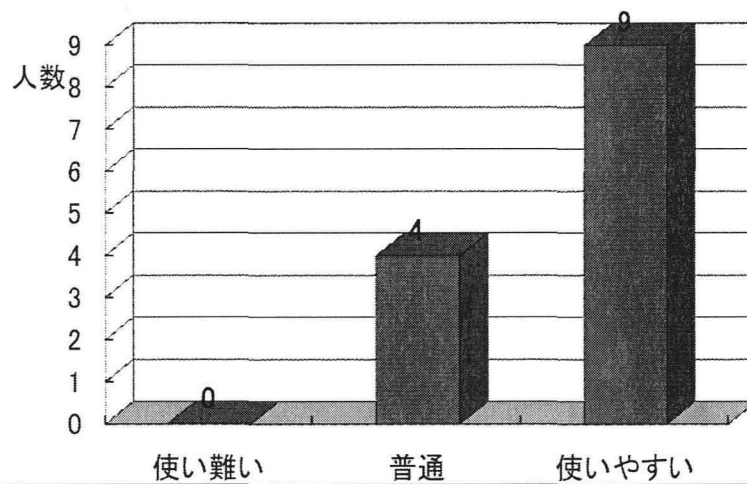
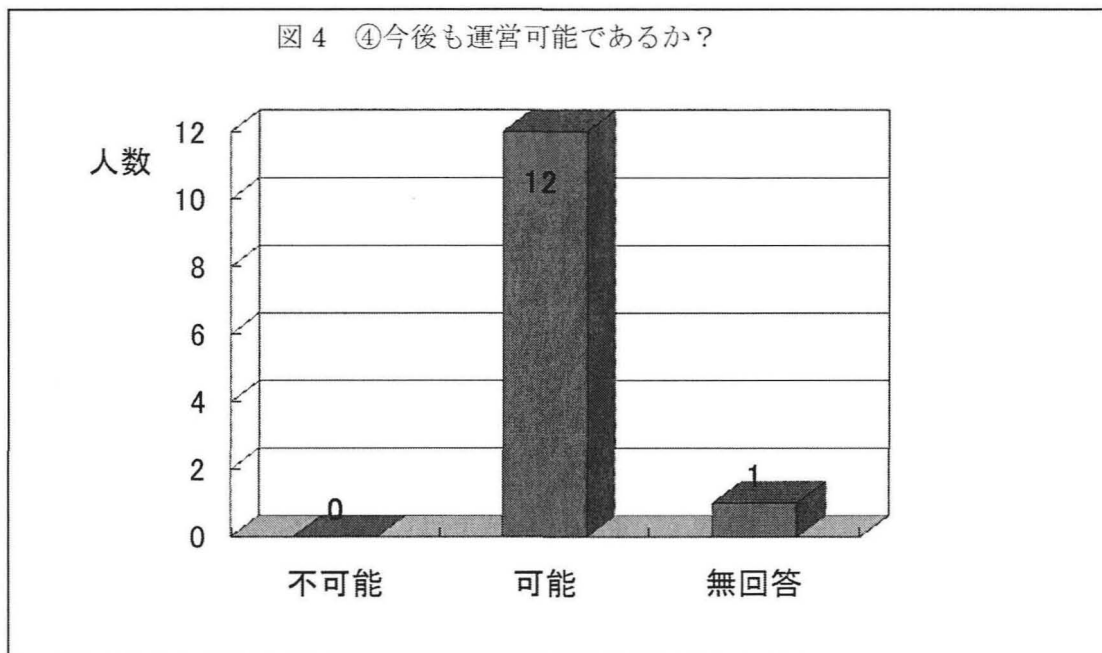


図3 ③マニュアルの使いやすさ





Ⅲ. 考察

看護師アンケート結果より、運営人数について毎月看護師3～4名で教室を担当していたが、業務量が調整できないという意見から参加人数を2名に絞り、改善を行った。また、14時までカンファレンスをしており会場の準備が間に合わないという意見から14時15分に変更した。その結果、他の業務への支障が減り、安全に教室を運営することができている。そして、看護師が講師をする「日常生活の注意点」については、担当月毎の看護師が資料を作成することは負担であるという意見からマニュアルの作成も検討中である。しかし、「日常生活の注意点」のマニュアルを作成しても、看護師の知識や経験年数により説明できる内容に差があることが今後の課題となっている。

現在、教室運営マニュアルの使用や業務調整により病棟運営の教室の継続は可能である。病棟看護師が運営することで看護師の教室への関心がさらに高まり患者支援に生かすことができると考える。また、教室は看護師自身の教育の場としての役割も担っていると考える。

今回、看護師の運営にのみ視点をおいて報告したが、教室参加患者からは、教室をもっと開いてほしいという意見も聞かれ、患者にとってどのような教室がよいかを考えていく

必要がある。開催日数の増加・更なる内容の充実など課題が示唆される。

今後は看護師がさらに運営しやすく、また患者の意見が反映された教室作りを考えていくことが必要である。

IV. 結論

人的資源により病棟看護師が教室を運営することができた。患者に支援されている内容を把握することができ、教室に対して関心を高めることができた。